

平成 29 年 度 学 校 自 己 評 価 報 告 書

学校教育目標		<p>○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。</p> <p>○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。</p> <p>○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。</p>				
本年度の重点目標		<p>□生徒の基本的生活習慣の定着を支援するとともに、生徒の社会性の涵養に努める。</p> <p>□授業改善に向けての取組を継続し、生徒の基礎・基本の学力の定着に努める。</p> <p>□各年団におけるキャリア教育の充実を図り、生徒の進路意識の高揚と進路実現に努める。</p> <p>□生徒理解と情報共有を進め、生徒の居場所・安心な学びの場づくりに努める。</p>				
重点項目	短期経営目標	具体的な計画	評価項目	達成状況	評定	改善方策
1 教 務 課	(1)授業改善の組織的取組を継続しつつ、家庭学習の習慣を付けさせ、より高いレベルの学力の育成を目指す。	<p>①これまで、毎年統一テーマを設けて授業改善を行い、授業の相互参観やグループ討議を行うことで、改善の進捗状況を確認してきた。</p> <p>今年度は家庭学習の習慣をつけさせるために、毎週全校生徒に、各教科交替で週末課題を実施し、その提出やテストで評価を行う。</p>	①各教科による成績の分析と授業アンケートの結果	<p>①職員会議後のミニ研修等を通して、最近数年の取組を振り返り、徹底を図った。教員向けに教務課通信を発行し、授業作りの基本を確認した。</p> <p>また、教員全員研修を行い、教科のグランドデザインの設計を行うとともに、若手教員対象の研修によって授業力の底上げを図った。</p> <p>週末課題の提出者を増やすために、教科だけでなくHR担任と連携して生徒に呼びかけた結果、3分の1程度だった提出者がやや増える傾向にある (1年50%、2年40%程度)。</p>	B	<p>①教務課実施の授業アンケートによれば、授業担当者によって指導力に差があることに不満を持つ生徒がいる。授業規律、授業のユニバーサルデザインだけでなく、授業作りの基本も含めた全教員の技量の底上げが必要である。そのためには、今年度同様に研修や教務課通信を粘り強く継続していく必要がある。</p> <p>週末課題については、粘り強い呼びかけとともに、生徒が提出の意義を感じる課題作成も必要である。</p>
	(2)評価方法等の周知を継続する。特に欠席の多い生徒の意欲を喚起することで、未履修・未修得の減少に努める。	<p>①従来、入学予定者登校日・オリエンテーション・PTA総会・授業などを通じて生徒・保護者に評価方法を周知し、2学期中間テスト後の11月に成績不振の生徒を個別に呼び出して教務課長が注意喚起を行っていた。</p> <p>今年度は従来の取組に加え、欠席が多い生徒については2学期前半の10月に教務課長が行う。</p>	<p>①未履修・未修得者数の減少。</p> <p>*未履修・未修得科目を持つ 1年/2年/3・4年 28年度末19名/18名/15名 27年度末12名/10名/7名 26年度末26名/19名/8名 25年度末24名/9名/6名</p> <p>*評点による未修得科目の延べ数 28年度末47科目 27年度末35科目 26年度末89科目 25年度末57科目</p>	<p>①計画通り、生徒・保護者に評価方法を周知した。また、2学期中間考査終了時点で、多くの課題を抱える2年生5名、1年生4名に個別の指導を行った。</p> <p>2学期終了時点での警告点保有者は次の通り。 1年/2年/3・4年 12名/15名/15名 (1学期終了時点。 19名/26名/29名)</p> <p>年度途中で改善が見られ、昨年度末よりも良い状態である。</p> <p>なお、2学期末までの退学・転学・休学者数は次の通りである。 29年度14(7)←28年度6(4)← 27年度13(8)←26年度16(12) ←25年度24(13) ( )は1年生の内数</p>	B	<p>①アンケートによれば、成績評価の方法を十分に分かっていない生徒が20%近くいると思われる。</p> <p>教科担任が説明するのはもちろんだが、教務課からも考査期間中を中心に繰り返し説明していく必要がある。</p>

	<p>(1)生徒の基本的な生活習慣が定着し、社会性を身につけることができるよう支援する。</p>	<p>①クラスごとの遅刻総数の数値を一覧にし、見える化を図るとともに、遅刻回数が多い生徒の家庭に定期的に連絡をすることで業間遅刻の減少に取り組む。</p> <p>②生徒会等の「あいさつ運動」を教員、委員会と連携して行い推進する。</p> <p>③頭髪(帰って直して行く指導)やピアス・携帯・イヤホン(預り指導)に関する指導に取り組む。</p>	<p>①遅刻総数の減少 28年度：5,028回 27年度：5,027回</p> <p>①②③学校評価アンケート結果 《基本的な生活習慣の定着》 教員 保護者 生徒 28年度：1.4 1.1 0.7 27年度：1.4 1.1 0.8</p>	<p>①全体の遅刻回数は、今年度は4,051回、昨年度は4,363回(12月末現在)と300回以上減少した。 業間遅刻回数は、今年度は869回、昨年度は1,103回(12月末現在)と減少した。 学校評価アンケート結果 《基本的な生活習慣の定着》 教員 保護者 生徒 29年度：1.4 1.0 0.6</p> <p>②「あいさつ運動」は生徒会、委員会を中心に計画的に実施しているが、委員会や学年により参加人数に差があった。</p> <p>③今年度加えたイヤホン指導は、年度初めに周知徹底をしたことで年度初めから付けることが無くなった。 頭髪指導については、定期的に話し合いを行う事でより学校全体で統一して行う事ができた。</p>	B	<p>①遅刻総数は、全体では減少したが、1学期に比べ2学期の方が回数が増えている。学校生活に慣れたことによる気の緩みを起こさない為にも年度当初だけでなく2学期初めにも今までより啓発活動や家庭に強く協力を訴える必要がある。</p> <p>②あいさつの必要性、意義についての理解を深める為にHR、授業、通信、掲示板での指導を行う必要がある。</p> <p>③年度当初に生徒に周知徹底を図るだけでなく、教員に対しても校内ルールの周知徹底を図る。 また、保護者にも年度当初に周知徹底を図り、連携を強化する。</p>
2 生徒課	<p>(2)生徒が学校行事や部活動・委員会活動に参加し、ボランティア活動などの社会貢献活動に積極的に関わり、「自己有用感」を高めることができるよう支援する。</p>	<p>①部活動紹介を行う等で部活動の活性化と入部者数の増加に取り組む。</p> <p>②活動計画・委員会目標掲示等により、委員会活動の推進を目指す。</p> <p>③生徒会による自主的活動の活性化に取り組む。</p>	<p>①入部者数の増加で評価する。 28年度：64名 27年度：68名</p> <p>①②③学校評価アンケート結果で評価する。 《学校行事・生徒会活動・部活動に積極的に参加》 教員 保護者 生徒 28年度：1.2 1.1 0.5 27年度：1.5 1.1 0.8 《自分は役に立つ》 教員 保護者 生徒 28年度： 0.1</p> <p>③学校評価アンケート結果で評価する。 《ボランティア活動に積極的に参加》 教員 保護者 生徒 28年度：0.8 0.9 0.6 27年度：1.3 1.1 0.9</p>	<p>①今年度の部員数は78名と昨年度に比べ増加した。 全国大会へは、新たにバスケットボールが加わり、ソフトテニス・バドミントン・卓球・陸上競技を合わせて5つの部が出場した。</p> <p>学校評価アンケート結果 《学校行事・生徒会活動・部活動に積極的に参加》 教員 保護者 生徒 29年度：1.2 1.1 0.4</p> <p>《自分は役に立つ》 教員 保護者 生徒 29年度： -0.1</p> <p>②風紀委員会による身だしなみチェックや交通安全委員会による鍵かけのチェックなど新たな取り組みが行われた。</p> <p>③文化祭では、箭田幼稚園の園児を招待して展示を楽しんでもらうなど従来の清掃ボランティアなどに加えて地域貢献に努め、好評価を頂いた。</p> <p>学校評価アンケート結果 《ボランティア活動に積極的に参加》 教員 保護者 生徒 29年度：1.0 0.9 0.4</p>	A	<p>①年度当初に行った部活動紹介の充実を図る。活動状況がわかるようにポスターなどの発行を行う。</p> <p>②定期的に委員会を開催することで年度当初に目標を立てた後の振り返りを行う。</p> <p>③生徒会の活動状況がわかるように生徒会通信の充実を図り、各行事の参加人数を増やす。</p>



4 厚生課	<p>(1) 生徒・保護者への健康・安全に関する知識の啓発活動に努めるとともに、疾病治療率の向上を図る。</p>	<p>①健康・安全に関して生徒や学校の実態に即した情報の提供を印刷物や電子媒体によって行い、健康・安全に対する知識の啓発に取り組む。</p> <p>②生徒の心身の健康状態を的確に把握し、疾病治療の必要性を個に応じた面談や紙、電子媒体によって知らせる。</p>	<p>①学校評価アンケートの結果 《健康の増進と安全保持》 教員 保護者 生徒 28年度：1.2 1.3 0.9</p> <p>②疾病治療率 眼科 歯科 28年度：40%、 21.6%</p>	<p>①保健だよりを10回発行してきた。校内掲示を1年を通じて工夫して目をひく展示物とした。また、保健委員が熱中症予防について保健集会で説明した活動等をHPに掲載して生徒の自己有用感の向上もめざした啓発活動を展開した。</p> <p>学校評価アンケート結果 《健康の増進と安全保持》 教員 保護者 生徒 29年度：1.5 1.2 0.7</p> <p>②倉敷eこねつとや保健だよりを利用して健康診断や医療機関の受診等に係る情報の周知を図った。また、保護者面談の際には、個に応じた疾病状況の説明や早期治療の勧奨を行った。</p> <p>疾病治療率 眼科 歯科 29年度：46.6%、 18.4%</p>	B	<p>①教員の活動は活発化しているものの、発信したことがさらに生徒にわかりやすいものになることを意識して工夫する。</p> <p>②眼科も歯科も治療率はまだまだ低い。様々な機会をとらえ、健康の重要性が理解できるよう啓発活動を継続する。また、保護者への直接の働きかけを一層丁寧に行う。</p>
	<p>(2) 特別な支援を必要とする生徒に配慮した学びやすい環境作りに努めるとともに、生徒の環境美化意識の涵養を図る。</p>	<p>①ユニバーサルデザインに立脚した教室の整備に引き続き取り組み、学習しやすい環境作りを行う。</p> <p>②教室の環境美化に係る重点項目を一定期間ごとに定めて、教職員の共通理解のもと、生徒に実践を促す。</p>	<p>①学校評価アンケートの結果 《教室整備》 教員 生徒 28年度：1.2 0.5</p> <p>②学校評価アンケートの結果 《環境美化意識》 教員 生徒 28年度：0.8 0.6</p>	<p>①教室環境のユニバーサルデザインについて、年度当初に職員間で共通理解を図るとともに、それに基づいた全教室の統一的整備をした。年度途中にも必要に応じて、再整備を行った。</p> <p>学校アンケート結果 《教室整備》 教員 生徒 29年度：1.3 0.5</p> <p>②重点目標を各学期ごとに定めて職員及び生徒に周知した。また、目標の達成状況を美化委員に評価させたり、美化に関するポスター作成により自己有用感の育成にも努めた。</p> <p>学校評価アンケート結果 《環境美化意識》 教員 生徒 29年度：1.2 0.2</p>	B	<p>①生徒にもユニバーサルデザインにどんな意味や効果があるのか、その意図を理解させるよう努める。</p> <p>②重点目標を設定する方法は、初めての取組みであり、十分定着できなかったので定着に努める。また、生徒の評価低下の原因は、アンケートの文言を変えたことによるものと思うが、美化について向上した点を評価するなど、生徒のさらなる意欲向上のための工夫を図る。</p>

5 年 団	<p>(1) 保護者との連携・協力を軸に、生徒が安心して学校生活を送れるクラスづくりに努める。</p>	<p>(1年団) 保護者との連絡を密にし、生徒面談により状態の把握、情報の共有を行い、適切な指導の方法を見だしよりよい学校生活の改善を図る。</p> <p>(2年団) 保護者との連携・年団教員での情報交換を密にし、生徒面談を通して改善を図る。</p> <p>(3・4年団) 保護者との連携を密にし、日々の生徒情報交換の内容を、週ごとに年団で整理し共有する。</p>	<p>(1年団, 2年団, 3・4年団) 学校評価アンケートの結果を活用する。</p>	<p>(1年団) 学期ごとの面談に加え、日々の生活の中で個別の面談を行い、さらにそれを教職員間、保護者間で情報の共有をし、効果的な指導ができた。場面や状況に応じて教員間の分担がスムーズにできたことでより効果があがった。学校評価アンケート結果からも「真備陵南に進学して良かった。」の生徒の声が7割弱。保護者の声が9割を占めている。</p> <p>(2年団) 各学期の面談週間に加え、必要に応じて個別に面談を行い、生徒の状態把握に努めた。また、状況に応じて保護者への連絡を欠かさず行き、家庭との連携を図った。主任会議による情報交換も行い、効果があった。学校評価アンケート結果によると、「クラスづくり」について、あてはまると回答した生徒は6割強程度だった。また、「けじめある生活を送れているか」については、7割弱が送れていると答えており、教職員の認識より高かった。</p> <p>(3・4年団) 面談週間の面談に加え、必要に応じて、面談を行い生徒の状態把握に努めた。また、状況に応じて保護者への連絡を行うとともに、定期的に年団会議(15回)を行うことで、教員が共通理解を持って指導にあたることができた。年団主任会議においても、有意義な情報交換ができ、前向きな提案が多く出された。学校評価アンケートの結果からも、教職員と保護者から高い評価(8割以上があてはまると回答)を得ている。</p>	B	<p>(1年団) 集団として安心した学校生活を送れるクラス作りを引き続き連携をとりながら行っていくと同時に、生徒一人ひとりに自己有用感を持たせるよう心がけ、安心、安全はもちろんのこと、充実した学校生活を送れるような様々な場面でのアプローチをしていきたい。</p> <p>(2年団) 生徒のわずかな変化にも気づけるよう、日常的な声かけや面談を大切に、継続して行う。生徒の話にしっかり耳を傾け、生徒の様子や状態を年団教員を主に、全教員で共有する。保護者への連絡を細めに行い、良好な関係作りに努める。</p> <p>(3・4年団) 生徒一人ひとりの様子や状態について年団教員を中心に全教員で共有できるよう、職員会議や年団会議の生徒情報交換の内容の焦点化を図る。また、生徒情報フォルダの利用を充実させることで、チームとして生徒指導にあたり、生徒一人ひとりが自己有用感を実感できる集団作りに努める。</p>
	<p>(2) 各課や年団との連携を進めて生徒情報や指導方法を共有し、生徒の社会に適應する力を身につけさせ、進路実現に向けた指導の充実を図る。</p>	<p>(1年団) 進路希望調査などの生徒情報を共有し、担任面談や進路講演会を通して生徒の進路意識を高め、将来に向けて身につけておくべき社会人基礎力を育成する。</p> <p>(2年団) 時間を意識した先を見越した行動を促し、TPOに応じた行動が取れるよう指導し改善を図る。同時に、進路LHRや進路講演会を通して、生徒の進路意識を高めるよう指導する。</p>	<p>(1年団) 講演会後のアンケートや学校評価アンケートの結果を活用する。</p> <p>(2年団) 学校評価アンケートや、講演会後アンケートの結果を活用する。</p>	<p>(1年団) 面談ごとに進路希望調査を行い、将来を考えるきっかけを作ることができた。進路LHRにおいても、正社員の福利厚生を学ばせたり、実際に履歴書の一部を書く練習を行い、具体的にどのような力が必要か考えさせたり、実感させることができた。アンケートでは、8割の生徒が進路学習が役に立ったと回答している。</p> <p>(2年団) 3回の進路希望調査を実施。加えて、講演会や面談、進路LHRを通して、進路希望を探ったり、職業理解を進める機会を設けた。学校評価アンケートや講演会後のアンケートでは、約8割の生徒が進路学習の充実を感じている。</p>	B	<p>(1年団) 具体的な進路意識を持たせ、そこに向けてやらなければならないこと、今できることを明らかにさせ、進路意識の高揚とともに、書類の書き方、受験知識などの力をつけさせることでインターシップ、オープンスクールなどの参加、資格取得などの具体的な動きにつなげていきたい。</p> <p>(2年団) 進路講演会・進路LHR・進路希望調査による生徒の意識付けの継続。日常生活や授業・面談の中で進路意識の高揚につながる声かけや情報提供をする。早めのオープンスクールやインターシップへの参加を促す。</p>

5 年 団		(3・4年団) 進路課および他の課と連携して面接試験対策を充実させ、個に応じた進路指導を実施する。	(3・4年団) 進路のミスマッチをなくし、就職率、進学率を向上させる。(28年度 卒業生47名:就職者25名、進学者17名、残り5名は独自の進路)	(3・4年団) 就職率は昨年より高くなったが、進学率は低くなった。(今年度卒業生46名:就職者28名、進学者10名、残りの8名は今後も進路決定のため、支援を続ける。)	(3・4年団) アルバイト優先の生徒や卒業することだけを目標に学校生活を送る生徒へ進路意識を持たせる。 アルバイト経験の全くない生徒について、進路課と連携してインターンシップを企画し進路意識を持たせる。
6 学 校 運 営	(1)「真備陵南生の自己有用感を育む」取組(Mabiryounan Valued Personality)」の継続とより一層の充実を図る。	①自己有用感を育む6つの「る」=「認める、信じる、ほめる、しかる、体験させる、考えさせる」の取組を日常の教育活動で実践し、生徒への定着をさらに推進する。  ②PTA・箭田まちづくり協議会との連携や異世代交流を通して自己有用感を育む取組を深化させる。その際に振り返りや反省を文章で表現させるなどフィードバックシステムを取り入れる。	①②自己有用感に関するアンケート等を行い達成状況を把握する。 《自分は役にたつ人間である》 生徒(7月) (12月) 28年度 -0.5 0.1 (33%) (53%)	①MVPの活動は、係を中心に各課・年団に広がり体系化が進んだ。またMVP会議を10回行い、活動内容の精選や教職員への報告、生徒へのアンケート等を実施した。生徒への定着と教職員の研修の場として、自己有用感をキーワードとする講演会や県外の先進校視察を実施し、学んだことなどを校内で共有した。 《自分は役にたつ人間である》 29年度 -0.1 (49%)  ②幼稚園、小学校、中学校、高齢者福祉施設との交流は計画通り実施した。異世代交流は、生徒の振り返りから自己有用感の育成に役立っていると思われる。  《開かれた学校づくり》 教員 保護者 29年度 1.5 1.1 28年度 1.2 1.0	B  ①教職員から生徒に対しては、6つの「る」を意識した声掛けはできているが、生徒間となると課題がある。今後も生徒の成長を促す指導や予防的な指導、課題解決的な指導について研究し、自己有用感を高め居心地のよい学校にしていきたい。  ②HPでの情報提供は増加したが、保護者への働き掛けが十分に行われているとはいえない。保護者向けの研修会や講演会等を企画してみたい。
	(2) コミュニケーションの場づくりを工夫し、協力・協働体制の推進と校内チーム力の向上を図る。	①MVPの活動(OJTチーム)を中核に校内組織をより活性化し、チーム力の向上と人材育成に取り組む。  ②校内ルールと校内研修計画等の「見える化」を継続し、風通しのよい職場づくりを行う。	①②学校評価アンケート結果状況 《協働体制づくり》 教員 28年度 1.2 27年度 1.2  《やりがいのある職場》 教員 28年度 1.4  《校内ルールを理解し、守っている》 教員 28年度 1.6	①MVP活動を含め、生徒指導への対応や授業改善の校内研修等を通してヤングリーダーやミドルリーダーの活躍する場が増え、組織的取組も定着してきた。 《協働体制づくり》 教員 29年度 1.5 (92%)  《やりがいのある職場》 教員 29年度 1.4 (92%)  ②不祥事防止のための自己チェックシートが過去4年間で最も高い数値であった。これは校内ルールと校内研修計画の見える化や不祥事防止研修の成果であると考えられる。 《校内ルールを理解し、守っている》 教員 29年度 1.7 (97%)	B  ①②一部の教職員に負担がかからないよう組織で対応しているが、ますます多様化する生徒や保護者への対応は、さらなるチーム力の向上が求められる。

4段階評定(A:目標を十分達成、B:ほぼ目標を達成、C:やや不十分、D:改善を要する)